

『二月テーゼ』とM・N・ロイ

——一九二七年の農業革命をめぐる——

松元 幸子

M・N・ロイ (Manabendra Nath Roy 一八九三—一九五四) が国際的に有名になったのは、一九二〇年コミンテルン第二次大会で『民族・植民地問題にかんするテーゼ』をめぐるとニンとの論争以来である。筆者は、先に、この論争を検討しつつ、コミンテルンにおける民族解放理論の形成を明らかにしたが、⁽¹⁾ これからのべようとする『中国情勢にかんするテーゼ』は、既にこの『民族・植民地問題にかんするテーゼ』および『補足テーゼ』が示していた原則的命題を、一九二二年の『東方問題にかんするテーゼ』を経て、中国の情勢に応じて歴史的に具体的に発展させたものである。このテーゼは、しかも、中国革命が重大な局面にさしかかっていた一九二六年一月二日に、コミンテルンによって示された中国共産党の行動方針となるべきものであったことに大きな意義をもつものである。そして、このテーゼを携えて、重大な段階を迎えていた中国革命を指導するために中国に派遣されたのが、ロイであった。本稿では、この『中国情勢にかんするテーゼ』を指導・実践するに際して、

現実の中国でロイがいかに対処したかについて焦点を絞ってのべることにした。

一九二六年一月一六日、コミンテルン第七回執行委員会拡大総会(以下コミンテルン第七回プレナムと記す)は、『中国情勢にかんするテーゼ』(以下『二月テーゼ』と記す)を満場一致で決議した。

このテーゼの骨子はつぎの四点に要約できるであろう。第一は、中国革命の性格を世界の反帝国主義革命の欠くべからざる一環として明確に位置づけていること。つまり、中国革命は、一八世紀の西欧における古典的ブルジョア革命、ならびに一九〇五年のロシア革命ともまったく異なった特殊条件——外国帝国主義国の支配下におかれた半植民地的状態——のもとに発展しつつあり、中国はこの革命運動によってブルジョア民主主義国家を創設するのではなく、非資本主義(＝社会主義)国家の建設を目指していること。したがって、中国革命は、社会主義社会への過渡期としての、プロレタリアート、農民、その他の被抑圧階級による民主独裁政治を出現させねばならないこと。第二には、この第一の規定からも示されている通り、既に革命の指導権を掌握しつつあった労働者階級が革命を指導しなければならぬこと。第三は、中国革命の闘争は、帝国主義にたいして闘われるとともに、国内の農奴的半封建制にたいして闘われねばならず、それには徹底した農業革命が遂行されねばならない

こと。そうして第四に、農業革命は、国民党および広東政府との連携においておこない、国民党を真の国民の党に改編する必要のあること。さらに、これら四点の中には、中西功の指摘にもあるように、「そこには、ブルジョアジーの反革命化の予知、農業革命、労農同盟、革命武漢政府の階級的性情、人民の軍隊、武装闘争の農村での先行的発展（農村根拠地の先行）、革命統一、戦線の形成（国民党をなお利用し、それを徹底的に改組すること）、党の独自の強化、その他必要なすべてのことが提起されている」のである。

さて、『二月テーゼ』の中でも中心的課題とされた農業革命は、およそつぎのような内容をもっている。

すなわち、農業問題が革命の現段階で最も鋭化した形態をとっており、それが現状の中心点となっている。この基本問題に大胆に近づき、それに徹底した解答を与えることができる階級が革命を指導しうるであろう。そしてこの唯一の階級がプロレタリアートである。プロレタリアートは農民との同盟を強固にし、徹底した農業綱領を農民に示さねばならない。プロレタリアートは農業綱領の基本点に土地の国有化を据えねばならない。しかし、中国国内の社会・経済的發展の不均衡に依りて、戦術を変えつつ、中国共産党・国民党はさし当って、つぎのような諸方策をすみやかに遂行しなければならぬ、として、十一項目にわたる具体的闘争課題を提起している。この中には、小作料の最大限低減。多様な課税の廃止と単一の累進耕作税の設定。教会・寺院および反動軍閥に属している土地の没収。小

作人に、土地の一部分の永代小作権を保証。地主階級の軍隊の武装解除と貧・中農層の、武装化などが含まれている。さらに、『二月テーゼ』は、農業革命をより一層発展した段階に移行させるために、共産党に指導された農民委員会（註）の組織を通してそれは遂行されるであろう、とした。そして、この農民委員会は、「革命の發展の過程で前記の諸要求を実現させるために、またもっと徹底した諸要求をつくって闘争を強化するために必要な権限と力とを得るであろう。この農民委員会が人民政府および農村地帯の人民軍の基盤となるであろう」と規定されたのである。

一九二七年四月一二日の上海クーデタを契機として、それまで中国革命の一翼であったブルジョア階級が蔣介石とともに統一戦線から離脱し、革命はより進んだ段階へと発展していった時点で開催された、コミンテルン第八回ブレナム（一九二七年五月一八日）は、新たな段階に即応した『中国問題にかんする決議』を採択している。この決議は、『二月テーゼ』の再確認を基本とし、さらにつぎのような点を一層強調している。すなわち、農業革命が中国革命の新しい段階の社会・経済的内容の基本であり、農民自身による下からの農業問題の革命的解決が現在最も重要であること。労働者・農民の武装政策が迅速に、大胆に、断固として遂行されねばならないこと。中国共産党は左派国民党に大衆を動員・組織し、国民党を広範な大衆組織にすること。労働者・農民のあらゆる種類の大衆組織を強化・拡大し、これらの諸組織の中で国民党へ加入の宣伝をおこない、

国民党を強力な大衆組織に変えること。広東政府をプロレタリアート・農民による革命的民主独裁組織に転化すること、であった。さらに、この決議は、共産党の独自性を強調するとともに、この党の独自性ということが、非プロレタリア階層、とくに農民からの孤立と、彼らの排除であると理解されてはならない点、および、「中国においては、国民党が、プロレタリアートの小ブルジョアジーおよび農民との直接的な接触を可能にする特殊中国的組織形態である」ことを改めて指摘している。また同時に、コミンテルンの政策が若い中国共産党によって必ずしも十分に理解されているとはいえない事実に基づく、中国共産党の農民運動にたいする誤りが急速に是正されることを決議は要請している。

二

ところで、ロイは、コミンテルン第七回ブレナム第一二会議(II)「中国情勢にかんする討論の継続」(一月三〇日)で発言した際、中国の革命運動の現状と方針とについて、主としてつぎのような点をのべている。すなわち、アメリカ帝国主義の人道主義的仮面を被った侵略的政策と、アメリカ帝国主義と中国民族運動内部の一分子との結託。反帝統一戦線におけるブルジョア上層部の反動性。農業革命の徹底化。革命におけるプロレタリアートの指導。民主独裁政権の樹立、等々。とくに、農業革命について、ロイは、中国共産党が農業綱領を定式化した際、その基本問題の欠落を指摘し、この基本問題は土地の国有化

でなければならぬと強調している。しかし、ロイのこの点の強調は、「行動のための、あるいは直面する諸要求のための綱領をもつことは必要であるが、土地の国有化が明確に規定されないかぎり常に日和見主義的逸脱の危機がある、」との関連での指摘であり、ロイが中国の現状に土地の国有化を即座にあてはめようとしているわけではない。要は、ロイが、「中国における即時の社会主義革命についてのべているのでも、プロレタリア独裁についてのべているのでもなく、問題は革命が民主政権の樹立を直接的な目的としてもつかどうか、また、いかなる歴史的段階を迎えようとも、一貫した発展的方针を貫くかどうかである」と続けてのべている点から、農業革命にたいするロイの主張のニュアンスは考察されねばならないであろう。これは、のちに、中共五全大会における汪精衛にむけてのロイの回答を検討する際考慮に入れなければならない点である。

ロイは、『二月テーゼ』の草稿を自分が作成したとのべているが、この真偽はともかくとして、ロイがこのテーゼを遂行する見解に立っていたとみて間違いないだろう。また、このテーゼに明確に立脚しようとしていた点については、既に中国に派遣されていたボロジンとははっきりと異なっている。

一九二七年二月に渡中したロイを待っていた最初の大きな事件が、上海クーデタであった。ロイはこれより先、既に二つの文書——「警告」(二月二七日)、「指導者を監視せよ」(三月九日)——を中国共産党広東委員会に提出し、これらを公表するよう要求していた。これらの文書は蒋介石の一連の反動的行動に

たいする警鐘であったが、中国共産党広東委員会によって公表を前者は延期、後者は拒否されてしまっている。しかしながら、当時中国共産党の指導部では、蒋介石の率いる国民軍を上海に進軍させることの是非をめぐって激論がたたかわされていたが、陳独秀を中心とした中国共産党中央委員会、ポイチンスキーの指導下にあった中国共産党上海委員会、それにボロジンなどの見解―蒋介石の上海進軍の意味を理解せず、その進軍を無条件に支持した―にたいして、ロイのこの「警告」がどのような批判的係わり方を示したのか明瞭ではない。

続く中国共産党五全大会は、とくに湖南・湖北を中心とした各省で既に進行しつつあった農民運動の高揚を背景に、農業革命をいかに展開するかを決する重要な大会であったし、またロイにとっても中国革命の直面している課題をコミンテルンの方針にそっていかに指導・実践するかという観点からも重要な大会であった。

中国共産党中央委員会は、蒋介石のクーデタ後、中断していた北伐を続行するかどうかをめぐって（主として対立は、続行を主張する陳独秀・ボロジン対これに反対するロイであった）討論を続けていたが、ロイは、この第二次北伐是非の問題も、基本的には農業革命遂行の是非と深く係わっている点を明確に指摘しており、この点にかんする態度は中共五全大会のロイの見解を貫いていた。

ロイは、この大会において、コミンテルンの『二月テーゼ』の要約的報告（五月四日）をおこなうとともに、陳独秀に

たいする反論（四月三〇日）、張太雷の発言にたいする反論（五月三日）、汪精衛の『二月テーゼ』にたいする質問の回答（五月四日）、「非資本主義的發展と社会主義―民主独裁とプロレタリア独裁」と題する報告（五月五日）を通して自己の見解をのべている。これらの中から、この時期で最も問題とされている、中国共産党と国民党との統一戦線と農業革命の遂行という点についてのロイの見解を検討したい。

ロイは、陳独秀報告にたいする反論の中で、一九二五年以降一九二七年までの中国革命における反革命勢力の結束過程を四段階に総括した後、中国共産党がこれらの反動の結束に対抗するための有効な手段をとり得なかつたのは中国共産党が「統一戦線の政策を追求した上でその基本的任務である階級闘争を展させることを怠つた」点にあるとのべている。例えば、ロイにしたがえば、一九二六年三月二〇日から北伐を開始する七月までの間に始まった反動の時期に、「共産党がブルジョアジーおよび『左翼』軍閥との統一戦線の必要性のみを過大評価することによって小ブルジョアジーの役割を過小評価する結果を導いた」のであり、「上海蜂起の失敗の主な原因は、小ブルジョアジーの重要性を正しく評価することができず、小ブルジョアジーをプロレタリアートの影響にしたがわせることができなかつたことに拠る」と指摘し、「小ブルジョアジーの重要性の過小評価は、上海で犯された個別の誤りではなく、党の歴史的誤りであった」とのべている。ロイは、ひき続き、この総括から中国革命の今後の発展はつぎのように推進されねばならないと

報告している。すなわち、大ブルジョアジーおよび封建的ブルジョア分子が国民革命の隊列から抜け出た現在、革命の基盤はプロレタリアート、農民、小ブルジョアジーである。これら三つの階級は外国帝国主義と国内の軍閥から搾取され、抑圧されている。そして、現在、革命の基盤を形成している階級連合の中で圧倒的多数を占めているのは、農民である。したがって、現在の基本的問題は農民の革命的エネルギーを解放することであり、まさに、革命の発展方向は、徹底した農業政策の必要、農業革命の必要を実際に示してきている。したがって、革命のつぎの段階は革命的民主勢力をうちたてることであり、しかもこの勢力は、労働者および農民の利益を守ることを基礎にしてのみ達成されうるのであろう。つまり、革命的民主勢力は革命の基礎を強化することによってのみ創られうる。そして、具体的にはつぎのような基盤の上に革命的民主勢力をうちたて、プロレタリアート、農民、小ブルジョアジーの民主独裁を樹立するであろう、とのべ、ロイはその具体的基盤をこのように指摘している。第一に、あらゆるものの基礎である農業革命。第二に、革命の成果を守るための農民の武装。第三に、農村の封建地主の権力を打倒するための農村自治政府の結成。第四に、民主独裁政治が実現されるような国家機構を創る。第五に、軍閥を革命家に変えることによってではなく、堅固な社会的基盤の上に革命軍を組織すること。プロレタリアートによって指導されるべきこれらの任務が果たされるならば、「われわれは小ブルジョアジーとの革命的連合を弱めることはない。それどころか、

われわれはこの連合を強め、これらの条件においてのみ小ブルジョアジーは有効に革命闘争に参加してくるであろう」とのべている。

このように、ロイは中国共産党と国民党との統一戦線と農業革命の遂行とを統一的に把握し、農業革命の遂行は小ブルジョアジーの利益と決して背反するものではない点を主張し、強調している。この点について、ロイは張太雷にたいする反論の中でもつぎのようにのべている。

張太雷が(ロイの報告によれば)コミンテルンの方針は客観的な情勢と一致せず、それはあまりに左翼的すぎ、この方針は革命的民主ブロックを破壊するであろうと主張したことについて、ロイは、コミンテルンの政策は社会諸勢力の客観的発展にしたがって提起されたものであり、共産党と国民党との間の基本問題、つまり、小ブルジョアジーにかんする問題は、現在の情勢では農業問題の解決の仕方と関係している、と指摘してつぎのようにのべている。すなわち、「たしかに、共産党の前には、土地にかんする農民の要求を支持するか、あるいは小ブルジョアジーとの友好関係のために農業革命を遅らせるか、そのいずれかを選ばねばならない二つの道がある。プロレタリアートは、小ブルジョアジーとの連携のために農民を裏切ることはできない。それに加えて、農業革命は農民の利益と一致するばかりではなく、同時に小ブルジョアジーの利益とも一致するのである。プロレタリアートは、小ブルジョアジーにその真の利益について説明し、小ブルジョアジーを封建的ブルジョ

ア的影響からひき放すことによって、革命的民主主義闘争に小ブルジョアジーの支持を獲得することができ得るであろう」とのべ、さらに、「これはただ純粹に革命闘争の過程でのみなされるし、また、実践を通して遂行されなければならない」点をつけ加えている。

三

しかし、このように、統一戦線と農業革命とを矛盾しないものとして把握し、むしろ農業革命を徹底することによって統一戦線は強められると一貫して主張しているロイにも、実践上つぎの点が問題として残るのである。そしてその点はやはりロイの一つの限界を示すものであるといえよう。

それは、中共五全大会で採択された「農業綱領」とロイとの関係である。われわれはいま、この「綱領」を詳細に検討するだけの紙数をもたない。しかし、この「綱領」が、「小地主と国民軍に参加した士官の土地とは没収されない」との一項を含むことによって、当時激しい勢いで展開していた農民運動をゆきすぎとして抑制する結果をもたらすことになった点、および、土地の没収にかんする右の一項は、あれほど激しく対立した陳独秀・ボロジンの一貫した主張でもあったにもかかわらず、ロイがなぜこの「綱領」にむしろ積極的な支持を与えただけでなく、五全大会を評して、「この会議はボルシェヴィキ的であり、中国共産党が真正のボルシェヴィキ党になりつつあることを示した」とまで賛美しているかについてである。R・C・ノース

はこの点をつぎのように指摘している。すなわち、「ロイは、汪精衛とのやりとりの間に——無意識的にか意識的にか——絶対的に重要な点を譲ってしまった。以前、彼は土地の没収を含めた農業革命に一貫した力点をおいていた。……それにもかかわらず、彼は汪への説明で、『現段階において、革命は諸階級の連合によって与えられているのであるから……プロレタリアートは、私的所有の即座の廃棄という計画をおしつけることはできない』と主張したのである。この決定的時点にいたって、『上から』の革命戦術と、『下から』の革命戦術とが真向からぶつかった。どちらかが他方に従属しなければならなかった」と。そして、ノースは、このロイの「突然の譲歩」がスターリンの指示によるものであると示唆している。しかし、果たしてそうであろうか。筆者は既に二で触れておいたように、ロイが土地の国有化で示されるような農業革命を主張したのは、それを直ちに中国の現状にあてはめようとしていたのではなかったということがある。したがって、ロイの実践上の重要な問題点が、ロイの「突然の譲歩」にあるというノースの指摘はあまり説得的ではない。筆者はむしろこれを、つぎに示されているようなロイの現状認識にその一つの原因があるようにおもう。

ロイは、中共五全大会後の五月一三日、「インフレコール」誌にあてた通信の中で、「現段階においては、農民蜂起が最も著しい特徴である。国民軍によって占拠された地方では、巨大な農民運動が起こっている。いくつかの地方では、農民組合が卓越した組織力となってきた。農民は自らを武装し、反動

諸勢力を武装解除している。彼らは地主の土地を没収している」と当時の激しい農民運動を指摘した後、ロイは、「この状況が共産党大会に反映された」とのべているのである。つまり、このことは、「農業綱領」がその後むしろ農民運動を抑制することになった事実を考えると、ロイが当時の高揚していた農民運動と当時の中国情勢とをいかに正当に評価・分析できなかったかを示す一つの事例となりえよう。このような点は、のちに汪精衛にたいしてロイが示した階級的認識の甘さ、つまり、国民党に結集していた小ブルジョアジーと汪精衛とを同一視することから生じた戦術上の誤りとともに、この時期で指摘できるロイの限界であろうとおもう。いうまでもなく、当時の中国における複雑な諸要素の中から提起された、統一戦線を維持しつつ農業革命を達成させるには戦術上相当の困難が伴ったであろうことは想像にかたくない。しかしながら、当時の情勢から考えて、農業革命を可能なきぎりにまで追求することによってのみ統一戦線もダイナミックに発展しえたであろうことは疑いないであろう。

最後に、ここで示されたロイの問題点の解明にとつてさらにいえることは、それまでロイが主として主張していた見解——植民地・半植民地諸国におけるプロレタリアート対ブルジョアジーの階級闘争の重要性——から考えて、中国およびインド等における、反帝統一戦線の問題および農業革命の問題がロイにどの程度実際に把握されていたかの検討が残されていることであらう。

(1) 拙稿『初期コミンテルンにおける民族解放理論の形成——コミンテルン第二回大会におけるレーニン・ロイ論争を中心に——』『歴史学研究』三五五号（一九六九年一月号）を参照されたい。

(2) *La Correspondance Internationale*, No 25, 7^e année, 20 février 1927, (VII^e Session du Comité Exécutif Elargi de l'Internationale Communiste, novembre-décembre 1926, Comptes rendus sténographiques), Feltrinelli Reprint, 1967, pp. 339—343.

(3) 中西功著『中国革命と毛沢東思想』一四四頁。

(4) スターリンによれば、農民委員会は農民組合とは異なり、農民組合は農民委員会のまわりにつくられ、農民組合は一定の権限が与えられて農民委員会になってゆく」とされている。(第七回ブレナム中国委員会における報告『中国革命の展覧』*Impressory*, vol. 6 No. 90, p. 1583.)

(5) *International press Correspondences*, vol. 7 No. 35, pp. 737—741.

(6) ロイは、一九二二年にコミンテルン執行委員会委員候補に選出され、一九二四年に正式の委員となっている。この第七回ブレナムでは中国委員会の書記として活躍している。

(7) *Protokoll der Erweiterten Exekutiven November-Dezember 1926*, Verlag Carl Hoym Nachf., Hamburg-Berlin NW6, Feltrinelli Reprint, 1967, S. 397—400.

- (8) *Ibid.*, S. 399.
- (9) *Ibid.*
- (10) ロイはこうのべている。「私独りは、……中国革命は決定的瞬間にきており、したがって、新しい方針がうち出されるべきで、国民党との連合から迷信をうみ出してはならないと主張したのである。私の見解は共産主義インターナショナル執行委員会で採択されたが、それは最初スターリン自身によって反対された。しかしスターリンは私の見解に引き入れられ、私の起草によつたそのテーゼは共産主義インターナショナル執行委員会によつて採択された。」(M. N. Roy: *Revolution and Counter-revolution in China*, p. 538 n.)
- (11) R. C. North & X. J. Eudin: *M. N. Roy's Mission to China*, Document 3&4.
- (12) 『革命の基礎と社会諸勢力』(中国共産党指導部にむける演説) *Ibid.*, Document 3, p. 165.
- (13) *Ibid.*, Document 10, 11, 12, 13, & 14, pp. 188—242.
- (14) 陳独秀・ボロジンが唐生智を「革命的に評価」したことへのロイの反論。
- (15) 『ボルシエヴィキ党』(中共五全大会で選出された中央委員会への演説) R. C. North & X. J. Eudin, *op. cit.*, Document 10, p. 276.
- (16) 中共五全大会でロイが『二月テーゼ』の要約的報告をおこなった際、汪精衛が、「共産党は革命における小ブルジョアジーの地位についてもっと説明を加えてほしい。具体的にいえば、党は小ブルジョアジーが革命の非資本主義的發展に従ってくると考えているのか」と質問したことにたいして、ロイは、非資本主義的發展は私有財産の廃絶も要求するが、現段階における闘争は、その完全な廃絶ではなく、革命ブロックを形成する三階級の利益に一致する限りにおいてのみ追求されるといふことであり、汪精衛の危惧はあたらなものと云ふ。
- (17) R. C. North & X. J. Eudin, *op. cit.*, p. 81.
- (18) 「ロイはこの問題にかんする突然の譲歩は、このコンテューストから説明されうるかもしれない」として、ボロジンがスターリンにあてた電報に基づく、スターリンの情勢判断の結果を示唆している。(*Ibid.*, p. 91)
- (19) *International Press Correspondence*, vol. 7 No. 41, pp. 909—910.
- (一九七一年一月一七日) (一橋大学大学院博士課程)